

沈黙が語る時

——戦争体験の継承と個別のリアリティ——

門野 里栄子

要約：戦争の非体験者が非体験者に平和を語り継いでいこうとする時、戦争の何を、どのように語り、それを平和活動へとつなげていけばよいのだろうか？沈黙という語り、戦争継承の一つのあり方である。本稿では、ひろみさんという女性の語りを通して、沈黙が語るためには何が必要かを考えてみたい。彼女の両親は、沖縄戦を体験しながらそのことについてはほとんど語らなかった。彼女の父親は、いくつかの戦争についての普遍的な言葉を語ったにすぎない。しかしながら、夢にうなされるなどの戦争体験の断片を垣間見せた。ひろみさんが、父親の普遍的な言葉と戦争体験の断片、そして沖縄戦に関する知識から「戦争」を構成した時、沈黙は戦争体験を語るのである。彼女の母親は、戦争体験について頑なに何も語ろうとせず、自らの体験を本や映画によって描かれる戦争イメージと一線を画した。ひろみさんは母親の態度から、平和な生活は戦争を日常生活から隔絶することによって保たれるのだと受け止めている。

キーワード：沈黙、語り、戦争体験の継承

When a Silence Narrates

——Inheritance of the War Experience and a Particular Reality——

KADONO Rieko

Abstract : When circumstances require us, who have no experience of war, to hand down peace to those who have no experience of war, how should we narrate about war and relate it to a peace action? A silent narrative is one way for the inheritance of war. In this essay, I will consider what is necessary to make a silence narrate through the narrative of a woman, Hiromi. Her parents told her hardly anything about the experience of the battle of Okinawa, although they experienced it. Her father just told her a few general phrases about the war, however he showed a part of his war experience by such ways as crying out in his sleep. When Hiromi constructs “war” by general phrases and a piece of the war experience of her father, and knowledge of the battle of Okinawa, a silence narrates the war experience. Her mother obstinately told her nothing about the war experience and drew a line between the experience of herself and images of war described in books or movies. Hiromi interprets through her mother’s attitude that peaceful life is maintained by separating war from daily life. We need a foothold on a particular reality in order to inherit war experience.

Key Words : silence, narrative, inheritance of war experience

1 はじめに

親が子に、おとなが子どもに語り伝えることをしな

くなったように思われる。そのことと、社会に起きて
いる問題の射程を個人内部か、せいぜい家族内や仲間
内に留める傾向は関連しないのだろうか。

たとえば戦争について、戦争体験を記憶にとどめて

いる年代が人口の2割となった現在、戦争の何がどのように伝えられているのか。今後、非体験者が非体験者に語り伝えなければならないとしたら、何をどのように伝えていけばよいのか。そのことを考えてみたいと思う。

「沈黙の語り」というものがあるのだとしたら、それは何かを語り継いでいくことの中で、とらえ方が最も難しい類のものである。これから戦争と平和の継承について考えようとしている私の前に、ある女性を通して「沈黙の語り」に触れる機会が現れた。私は、継承の問題を、最も難しい様式から始めることになった。

2 ひろみさんとの出会い

ひろみさんと出会ったのは、私が2003年3月末に初めて沖縄の伊江島を訪れた時である。阿波根昌鴻氏の反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」を見学中に、友人と二人連れだったひろみさんと出会った。私たち三人はここでしばらくの間話し込んだ後、阿波根氏と深く関わってきたある監督の自宅に招待され、翌日もこの監督の案内で一緒に島内を回った。

反戦平和資料館で話し込んでいる時、ひろみさんの二つの話が印象に残った。一つは「ヌチドゥタカラの家」についての言及である。わたしはこの日、午前中から資料館に入り浸り、資料を書き留めたりカメラに収めたりしていた。かび臭い匂いが少々気になった以外は特に感じることもなく、何時間も居座っていた。ところがひろみさんは、「空気が重くて、居られない」と言う。この資料館は、阿波根氏と伊江島住民が戦中・戦後に拾い集めた“がらくた”——血がついたままの衣服や鍋代わりに使っていた鉄兜、爆弾、パラシュート、土地闘争の立て看板など——が雑多に並べられている。ショーケースに納められている展示物は一切なく、一つ一つの「もの」が直接感じ取られるようになっている。しかし、それらのものと体験を通じた接点を持たない私には、「展示物」としか映らないものたちである。一方ひろみさんには、幼い頃使った生活用品もあれば、時折目にして見知っていたものもあった。後の加筆修正作業で、ひろみさんは「あるものは黙ってただそこに在るよう感じ、あるものは何かを語りかけているようにも感じた」と書き加えた。過去の記憶と直結している「もの」たちが、ひろみさんに資料館内の空気を重く感じさせていたのである。

印象に残ったもう一つの話は、両親と戦争に関することである。ひろみさんの両親はすでに他界してい

る。両親共に沖縄戦を経験しているはずだが、そのことについてほとんど語らなかったという。ひろみさんは両親の沈黙を、「話せないくらい悲惨で大変な経験をした」と受け止めており、「だから、今の平和な生活がいかに大切なのが伝わってきた」と話した。この点についても、ひろみさんは後の作業で次のように書き加えた。悲惨で大変な経験をした「と同時に、『過去の体験』として終わってしまっただけではない何かがあるのだろう。単に語らないのではなく、そこには両親なりの考えや思いがあつてのことだろう」。

3ヵ月後の6月、私に沖縄を再訪する機会が訪れたので、ひろみさんにファックスで、会って話を聞かせてもらいたい旨を伝えた。

3 「聞き取り」という方法について

私が誰かに対して聞き取りをする場合、その人のすべてを知りたいわけではない。私が関心を寄せる事柄について、語ってほしいのである。ここでの関心事は、「戦争の継承」である。また、限られた時間内での聞き取りであることも考慮して、インタビューの目的をできるだけ具体的にあらかじめひろみさんに伝えておいた。

事前に伝えた内容は、以下の通りである。私は現在、戦争や平和について一般の人たちに知られていない現実を知らせ伝えていく活動をしていること、また研究として一般の人々の戦争・平和観を書き留めていきたいと考えていること、ひろみさんと出会った時に印象に残る言葉(上記)があつたのもっと詳しく聞きたいこと、である。実際の聞き取り場面では、ひろみさんはこちらの意図をよく理解してくれていたもので、私から発話を促す必要はほとんどなかった。もちろん、より踏み込んだ質問が必要な場面もあった。それは、社会に目を向けるようになったきっかけについて言及した場面である(ただし、本稿ではこのテーマについては詳しく扱わない)。ひろみさんはそのきっかけについて、はじめは「特に意識はしていない」と言っていた。私は、聞き取りの中でその時点までに得られた情報から、お母さんが亡くなったことを取り上げてみた。さらに、お父さんが亡くなったことを取り上げていくうちに、ひろみさんの口から一人暮らしを始めたことが出され、最終的に「独立」というキーワードが取り出された。

手紙や電話でのやりとりを含めて、聞き手と語り手が「対話」する手法を採用するにあたり、私は自分自

身が抱えている課題や個人的な経験をあえて積極的に自己開示した。その理由は、今回の聞き取りが「私の関心事」を前提に成り立っているものであり、その文脈の中でひろみさんの語りが構成されていく以上、こちらの立場を説明する必要があると考えたところにある。「継承」という課題を探求するという目的に向けて、ひろみさんが自分の記憶や経験をその課題へとつなげていくために必要な作業として、私との対話がある。したがって、「ひろみさんの語り」は、私とひろみさんの対話の中から紡ぎ出されたものである。実際の聞き取り場面は、「聞き取り」というよりは「対話」であり、聞き手と語り手による構成というよりは二人の対話者による構成であった。そのようなものとして、ここでの「聞き取り」を了解してもらいたい。

4 聞き取りの概要

2003年6月22日、私が宿泊していたホテルのロビーで11時半に待ち合わせをし、同ホテルのレストランで昼食を摂りながら、1時15分ごろまで会食した。聞き取りに要した時間は、約1時間半である。この日は、沖縄県民がアジア・太平洋戦争中の沖縄戦戦没者を弔う「慰霊の日」¹⁾の前日にあたる。

ひろみさんはプライベートな事柄に関して、あまり話しながらなかった。テープ録音も断られた。ひろみさんのプロフィールとして記すことができる項目は限られている。だからといって、聞き取りの目的に支障があるわけではない。ひろみさんは、40歳代、独身、1人暮らしを始めて10年近く、父親は10年前に亡くなり、母親は3年前に亡くなっている、5人キョウダイの末子である。

聞き取りの後、私がまず聞き取りの内容をノートから書き起こしてひろみさんに送り、加筆・修正をお願いしておいた。3週間後の7月末、聞き取りの内容に考察を加えた論考ができあがったのでひろみさんに送り、これに加筆・修正してもらうことにした。同年8月、私が訪沖した折、ひろみさんと会う機会を持つことができた。その時、ひろみさんは修正原稿を用意してくれていた。6月の聞き取りから8月の面談までの期間、ひろみさんからの電話が1回、私から聞き取りの感想、論文の目的、私自身の「戦争」へのこだわりなどを書いた手紙3通の送付があったが、原稿の内容について具体的な相談をしたのは、この修正原稿を前にした2回目の面談においてのみである。以下の考察は、初回の聞き取りに加え、ひろみさん自身の加筆・

修正および2回目の面談での聞き取りノートから構成されている。最終原稿となった本稿も、ひろみさんに目を通してもらった。

以下、ひろみさんの両親と戦争にまつわる語りを紹介する。

5 語られない戦争——父と母の記憶から——

十数年前、父が亡くなったのが10年前ですから、その数年前のことです。当時、父はすでに退職していました。慰霊祭に行く前だったか、帰ってきてからだったか、たぶん帰ってきてからだと思います。今日のように、暑い日でした。一人で行ったのか、誰かと連れ立っていったのかさえ覚えていません。ただ、当時父は体調を悪くしていたので、なぜそこまでして慰霊祭に行くのか気になったのを覚えています。そのことを父に問うと、こう答えました。「慰霊祭は沖縄の人のためだけにあるのじゃないよ。みんなのためにあるんだよ」。沖縄の人だけでなく、日本もアメリカもアジア近隣諸国の人々も含めて、すべての人のために祈る慰霊祭なのだと父は言うのです。それを言われるまで、私は「沖縄が」犠牲になったのだと思っていました。

また、こんなこともありました。私が何かのことで愚痴や不満をつい口にした時、父は言いました。「いろんな人がいていろんなことがあるけれど、戦争さえなかったら人は何でもできるんだよ」。その時は言葉の意味を深く意識していなかったのですが、心に残りました。きっと父自身が体験し、実感した事なのだろうと思います。今あらためて考えると、「戦争さえなければ何でもできる」という言葉は、戦争は悲惨であらゆる物を奪ってしまう、ただそれだけを言いたかったのではないと思います。逆の表現を使って、「平和であれば、人はいろんな可能性に満ちている」、そういうヒントを与えてくれていたのではないかと。父は、シンプルな物言いをする人でしたが、「答え」を言うような人ではありませんでした。平和であれば希望が持てることを、父は私に伝えたかったのだと思います。

父は何でもよく知っていました。テレビを見ながら、私が「これは何なの?」とか「これはどうして?」とか尋ねると、いつも解説してくれました。父に聞けば何でもわかる、という安心感がありました。その父が戦争体験については、ほとんど話しませんでした。話さないだけに、つらい体験をしたのだろうなと想像するしかありません。父は寝ていて、時折うなされることがありました。そのことを、家族はみんな

知っていました。戦争のことでうなされているのだからか?でも、本人が話さない以上、誰も聞こうとはしませんでした。

母もやはり、戦争のことは話そうとしませんでした。ある時、テレビで戦争関連の番組をしていました。そばにいた母に、私が「こんな感じだったの?」と尋ねると、母は「どんなテレビも映画も、戦争は映し出せないよ」と答えました。

私が映画『GAMA—月桃の花』を観た時も、そうでした。私は母と共通の話ができるかなと思い、「いい映画だったよ」と話しかけました。母はただ、「ああ、そうなの」と言うだけで、寂しそうな表情を浮かべていました。私はテレビや映画や本から影響を受けて戦争をイメージしている面がありますが、母にとってそれはきつとまったく違うものなのでしょう。表現しづらいいろんな体験や思いがあって、それは母に限らず、多くの人が今も持ち続けているのだと思います。

6 「みどり」——戦争と希望を具象するもの——

ひろみさんの父親が語った言葉は、戦争体験そのものについて語った言葉ではない。父親の戦争体験は、沖縄戦について知られているような体験——「鉄の暴風」と称されるすさまじい数の砲弾が頭上から降りそそぐ様、無差別に砲弾に食い尽くされていく人びとの様、強いられた集団自決の様——なのか、あるいはそうしたことは体験していないのか、本人より知る由はない。父親の体験がどのようなものであったかをここでは問題にしないし、また検証のしようもない。分析の起点は、ひろみさんが父の体験を語れないほど過酷な体験として私に語ったことにある。

また、父親の言葉は決して特別な言葉ではない。沖縄戦のことを多少知る者であれば、あの戦争が軍民・敵味方を問わず多くの犠牲者を出したことは周知の事実である。「慰霊祭はみんなのためにある」という認識は、特異とはいえない。「戦争さえなければ、人は何でもできる」という言葉もまた、沖縄戦に限らず戦争一般に関して言えることである。たしかに、一公務員である父親が語る言葉としては特異かもしれない。彼がクリスチャンであることが、宗教的および普遍的な思想を表現する言語的資源を与えたかもしれない。これらの言葉は、私的な空間ではあまり聞かれないとしても、公的な言葉としては耳にする。ただし多くの場合、反戦平和の言葉として響いてこない。なぜな

ら、普遍化された言葉は戦争のリアリティを包み込んでしまうからである。公的にはありふれた言葉が、ひろみさんにとって反戦平和の言葉として受け止められているのはどうしてなのか、そのことを問うてみる必要がある。

ひろみさんによる「父の過酷な戦争体験」という解釈に則って言えば、父親が語った言葉は戦場の忌まわしい体験の沼から蒸留された、いわば「純化された体験」のしずくである。しかしながら、体験が「言葉」として表出される過程において純化されたとしても、体験そのものは純化されないまま記憶の淵に沈殿しているかもしれない。そうした体験の断片が、時にひろみさんの目に見える形で立ち現れる。悪夢にうなされる姿や暑い日差しの中を慰霊祭に足を運ぶ父の姿が、それである。

そして戦争を具象する最たるものが、姉の名である。5人キョウダイの年長の姉は、戦後すぐに生まれている。当時の沖縄は、特に首里(現那覇市)から南部にかけて、草木一本生えないまでに破壊し尽くされた。隆起珊瑚礁からなる一帯は、焦土でありながら砕け散った珊瑚のために、あたり一面灰白色の世界だったと言われている。ひろみさんはこのような当時の惨状を、「知識」として知っている。廃墟の中で、ひろみさんの父親は生まれ来たるわが子に「みどり(美登里)」と名づけた。父の命名を、ひろみさんは「目に見える美しさだけでなく、人の心を潤すものを求めた」のだと受け止めている。身近にいる姉の名は、戦争を乗り越え、なお生きようとする人間の希望の表象としてある。

一方、かたくなに何も語ろうとしなかった母親は、娘と「体験の共有」を拒むことによって戦争に対する拒絶の姿勢を見せている。そこには自らが体験した戦争を、イメージによって映し出された戦争とはあくまで一線を画し、日常に持ち込むことを許さない態度がある。母親のこうした姿勢から、ひろみさんは戦争を日常から隔絶することによって平和な生活が保たれるのだと受け止めている。

7 戦争を継承する

ひろみさんの記憶の中で、戦争体験について沈黙してきた父親は、純化された言葉と日常生活で垣間見える戦争体験の断片によって、「戦争」を語ってきた。そしてひろみさんが学んだ沖縄戦に関する知識が、それらをつなぎ合わせる接合剤となる。個々の事柄が一

連の文脈を構成した時、「沈黙」は「語る」口を与えられるのである。文脈を構成するのは、他ならぬひろみさんである。父親ではない。父親は、個別の行動と沈黙を見せたにすぎない。ひろみさんが、「戦争」というキャンパスの上に父の言葉や行動を描き込んでいく中で、そこに生じた空白（沈黙）を背景との関連から読み取った時、沈黙は語り始めるのである。このことは、戦争の継承が体験を伝える側の問題である以上に、受け取る側の問題であることを示唆している。2回目の面談の時、ひろみさんはこう語った。

今から思うと、父はもっと伝えようとしていたかもしれません。末っ子で遅くして生まれた私のことがかわいくもあり、心配でもあったと思います。年若い、体調を崩していく中で、なんとか私に伝えようとしていたかもしれないのです。でも、日々の生活の中で、食事中にご飯を装ったり醤油を取ったりしながら聞いていたり、出かける前の慌ただしさに紛れながら聞いていたり、父の言葉をいい加減にしか聞いていなかったように思います。父を亡くした今、いくつかの短い言葉が心に残っているだけです。

ひろみさんが父親の言葉を反戦平和の思想として継承するには、それを受け止めようとするひろみさん自身の姿勢も必要である。父親の言葉は、個人的な言葉として日常に埋没している限り、特に意識されることはない。私的な事柄が、ひろみさん自身が加筆で説明しているように「特別なことではない私たちの生活と関連している『社会』」とつながった時、そこに新たな意味が見出される。社会への関心について、ひろみさんは次のように語った。

私は最近、大きな活動はできないけれど、社会のことに関心を持って見ていこうと心がけています。これまで、テレビのことはテレビのこと、ニュースはあくまでニュースでしかなく、自分の生活と関連づけて考えたりすることはあまりありませんでした。でも、ここ数年、少しずつ社会の問題を自分の問題として考えるようになりました。なぜそう考えるようになったのか、よくわかりませんが、思い当たることは一人暮らしを始めたことでしょうか。

父が亡くなってから、一人暮らしを始めました。それまでは家族の中から、つまり「守られた」中

から、世界を見ていたように思います。私は5人キョウダイの一人ですから、問題に対して「5分の1」の責任で見なければよかったように思います。ところが、一人暮らしになってからは1対1で臨まなければならなくなりました。自分の生活が、直接的にも間接的にも、金銭問題をはじめ環境問題や基地問題などと結びついています。「独立心」とまでは言えないかもしれませんが、一人になったことが社会に目を向けさせたのだと思います。

ひろみさんは、「個」の視点で物事を見るようになった今も、その根底には「父」があるという。「今起きていることについて、父に尋ねたらどんなふうに答えるだろうか……。こんな時、父だったらどうするだろうか……。私はいつも父をイメージして考えているように思います」。ひろみさんにとって父親は、戦争に限らず物事を考える「足場」となっている。

8 反戦平和の「足場」を持つ

ひろみさんの語りを通して、戦争体験者である両親から「沈黙という語り」によって反戦平和の思想が継承される様をみてきた。戦争を継承するためには、言葉や知識が必要であるが、学習や想像力だけでは補いきれないものがあるように思われる。個別の言葉と個別の知識に個別のリアリティが加わり、それらが「戦争」という一連の文脈を構成した時、意味ある連関がつくられる。このことは「沈黙」に限ったことではなく、直接的な言葉による語りにおいても同様であろう。戦争体験が語られるだけでは、戦争は必ずしも継承されない。また、個別のリアリティが継承にとって重要な要因であるとはいえ、それだけで継承できるというものでもない。さらに、ひろみさんの事例は、戦争という文脈を構成するための視点として「社会」とつながる個の視点が必要であることを示唆してくれる。

戦争の非体験者が学習や想像力によって獲得した「戦争」を非体験者に語っていく時、イメージされた戦争をみずからの「体験」としてそこへ乗せていく足場が必要である。たとえば、沖縄・本土を問わず人々の琴線に触れる名曲『さとうきび畑』を生んだ寺島尚彦は、本土の人間である。彼はさとうきび畑を歩きながら、戦跡案内者から足元にいまだ遺骨が眠っていることを指摘され、それを意識した瞬間「ごわわ」とい

う音と共に戦没者の怒号と嗚咽を聞いた²。戦跡案内者の語りとさとうきび畑とそこを吹き抜ける風の音が、「沖縄戦」を浮かび上がらせたのである。私自身の体験の中では、磨文仁の丘にある「平和の礎」がそれにあたる。国籍や軍民を問わず沖縄戦の犠牲となった23万余りの名が刻まれた、100基を越える墓碑が並ぶ。私は、読みあげられないまでもせめて目に収めようと試みた。端から順に目と足を使って1時間以上かけてなぞったが、その一部しか目的は達成されなかった。「23万余り」という数字が、名前をなぞっていくごとに人の命の重みとして心にのしかかった。また、ひろみさんが語った両親の「沈黙」も私の足場となる。私にとって理念的な言葉でしかなかった思想、捉えようがなかった沈黙は、ひろみさんによって構成された「戦争」を通して具体的な言葉となった。沖縄には、こうした「足場」がいたるところに用意されている。先の戦争で唯一地上戦を経験し、現在も基地という「戦場」を抱えているのが沖縄である。私が、戦争の継承の問題を沖縄で考えようとするのは、そのためである。

9 むすびにかえて

たまたまひろみさんと出会い、聞き取りと手紙、電話から本稿ができあがった。二回目の面談の時、修正原稿を携えてきたひろみさんは「対話型」聞き取りについて、次のような感想を述べた。

こういうやり方が新鮮だったし、私にとってうれしいことでした。これまでも人から意見を尋ねられるようなことがありましたが、「私は、こう思う」と言い放しでした。自分の言ったことが相手にどう伝わっているのか、どう受け止められているのか、どのように理解されているのか、わからないままでした。そこにコミュニケーションと呼べるものはありませんでした。だからこれは、原稿に書かれているように「対話」なのだと思います。こうして自分が言ったことが文字になり読んでみて、自分を客観的に見ることができました。

そして、修正原稿の最後にメモが残されていた。

門野さんとの出会いによって、少し踏み込んで、また少し異なった視点から物事に向き合っ

てみるということの必要性を感じた。自分だけの体験や想いに留まらず、視野をさらに広げることや自分で足を運ぶことの大切さも実感した。

父が私に伝えたかったのは、希望を持つこと！視野を広く持つこと、何が大事なのかを忘れないこと、その他たくさんのこと。お父さん、伝わっているよ。私も私なりに伝えていくね。ありがとう。

今回はじめて、意図的に対話型の聞き取り法を採用した。「平和を考える」というより大きなテーマの中で方法論を模索した時、対象者が持つ情報を単に書き留めるのではなく、対象者が所有している「資源」(私はこれをひろみさんへの手紙の中で「宝」と表現した)を用いて平和に向けて共に考えたいと思った。データが恣意的に操作されるというデメリットを考えてもなお、聞き取りの場が「参加者」にとって平和活動の一環となるのであれば、こうした方法があってもよいのではないかと思う。

注

- 1) 沖縄県では、6月23日を「慰霊の日」とし、沖縄戦最後の激戦地となった南部の戦跡地で「沖縄全戦没者追悼式」が行われる。この日は、沖縄戦を指揮していた日本軍の司令官・牛島満中将と参謀長・長勇中将が自決した日である。日本軍の組織的な戦闘は終結したとはいえ、その後も各地で米軍と日本兵の戦闘は続き、多くの住民を巻き込んだ。この日は、県主催の追悼式典のほか、団体や個人による慰霊祭が各地で行われる。
- 2) CDアルバム『さとうきび畑』に、歌詞カードとは別に添えられた『「ざわわ」の希い』と題された作者の文章(2001年記)から一部引用した。

【付記】

私はひろみさんに加筆・修正作業を依頼する手紙のなかで、本稿の目的を次のように説明した。ひろみさんの経験を私一人に留めず、より多くの人に共有してもらうために論文という形でまとめ、戦争と平和を考える手掛かりにしたいということ。そして、ひろみさんのなかにあるご両親の記憶を、記録として残す作業の手伝いをしたいということ。本稿がひろみさん自身のものでもあることは、最終稿に同封した手紙でも改めて強調しておいた。ひろみさんは最終稿を姉の美登里さんにも見せ、そのうえで本名を掲載する方がよいと判断された。ご本人の了解を得て、本名で掲載させていただくことにする。

ご両親の記憶というプライベートな事柄を、このような形で分かち合うことを承諾して下さっただけでなく、『さとうきび畑』や慰霊の日の平和行進など、沖縄について「初心者」である私の「案内役」となって下さったひろみさんに、心よりお礼を申し上げたい。